



高校野球のマナーとルールを学ぼう (第71回)



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

グラウンドでの試合を振り返り、高校野球の大切なマナーとルールを学びましょう。
あなたの「なぜ? どうして?」にわかりやすくお答えします。

マナー編 捕手が捕球直後にミットを動かす

捕手が捕球直後にミットを動かす行為については、悪質行為として2009年から指導徹底が図られていましたが、いまだに公式試合で見受けられますが…。

捕球直後のこの行為は、日本ではかつて捕手の高度なテクニックと思われてきたようですが、国際的には審判を欺く卑劣な行為とされています。是正に向け、2009年以降審判部でも指導徹底に掛け取り組んできているのに、いまだに試合後の振り返りで同行為を指摘する、あるいは講習会の投球判定練習時に捕手に指導する場面が見受けられます。

名捕手であった野村克也氏は、「捕手がミットを動かすのはダメ。捕手がボールだからストライクに見せようとする。」と解説されていたシーンがありました。来年3月7日には第4回2017ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)が開幕し、日本を含め世界16ヶ国・地域のチームが参加します。各チームの捕手のキャッチングを観察できる絶好の機会です。勝敗という面だけでなく、マナーという面で観戦することも勉強にしましょう。

ルール編 「ストライクゾーン」(野球規則 定義74)と「ストライク」

マナー編で、捕手が捕球直後にミットを動かす行為は悪質な行為であり、慎むべき行為であることを取り上げましたが、「ストライクゾーン」、「ストライク」についても一緒に確認しましょう。



公認野球規則の「定義74」で、「ストライクゾーン」は、以下のとおり定義されています。

「打者の肩の上部とユニフォームのズボンの上部との中間点に引いた水平のラインを上限とし、膝頭の下部のラインを下限とする本塁上の空間をいう。この**ストライクゾーンは打者が投球を打つための姿勢で決定されるべき**である」ので、打者が低くかがんで構えていても、審判員は投球を打つための姿勢に従って、ストライクゾーンを決定します。

また、「定義73」で「ストライク」は、(a)～(g)の7項目にある投手の正規な投球で、審判員によって「ストライク」と宣告されたものを指しますが、内、(b)項目の、「打者が打たなかった投球のうち、ボールの一部分がストライクゾーンのどの部分でもインフライトの状態で通過したもの」と定義されているように、審判員は、「**捕手が捕球した位置で**

はなく、本塁上の一定の空間(=ストライクゾーン)で判定」しているのです。ルールとセットで考えると、捕手のミットを動かす行為が慎むべき行為であることがより一層明確になると思います。